令和二年度入学者選抜学力検査問題

（前期日程）

国　語

（注　意）

1　問題紙は指示があるまで開いてはいけません。

2　問題紙は本文九ページです。答案用紙は三枚あります。

3　答えはすべて答案用紙の指定のところに記入しなさい。

4　字数制限のある解答欄への記入に際しては、句読点を一字と数えなさい。

5　マス目のある下書き用紙の様式は二〇字×三〇行（六〇〇字）です。
　答案用紙の一行あたり字数や総字数の指定とは異なる場合があるので、
　注意して利用してください。

6　問題紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

西欧に近代国民国家が成立するのは、一八世紀から一九世紀にかけてであるが、ナポレオン戦争（一七九六―一八一五年）は、その(1)イシズエを築くための戦争であった。ヨーロッパ全土は戦火に見舞われ、スタンダールは『パルムの僧院』（一八三九年）を(2)アラワし、レフ・トルストイは『戦争と平和』（一八六五―九年）で、この戦争のあらゆる側面を活写した。一八四八年革命（諸国民の春）は、ヨーロッパにおける国民国家体制が樹立された瞬間とも言えよう。これはたちまちのうちに世界に波及した。ベネディクト・アンダーソンが、『想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』（白石隆・白石さや訳、リブロポート、一九八七年）で言うとおり、国民国家とは、「国民主権」を標榜する限りにおいて、王政でも共和政でも共産国家であったとしても、樹立することが可能だ。こうした汎用性に加えて、「国民」という名によって統合された人々が持たされるナショナリズムは、国家の管理機能によって都合よく、特に軍隊の徴兵において有力な資源となる。国民主権とは、命が国家に担保されることでもある。

一九世紀に世界に国民国家が次々と誕生したのは、その背景に植民地主義による西欧列強の非西欧圏への侵略があった。日本も、この(3)チョウリュウの中で明治維新を迎え、かろうじて独立国家の体裁を整えて、世界デビューした。一八七二年の学制発布と、翌年の徴兵令は、国民国家の枢要な条件である、教育と軍隊からの国民化の第一歩であった。そしてそれからわずか三〇年足らずの間に、日本は対外戦争を戦うまでになった。国木田独歩は、従軍記者となって『愛弟通信』（一八九四―五年）を発表して、戦時の兵隊たちの日常をレポートした。文学者たちが戦争に赴いて状況を報告するという「伝統」は、この時から始まったと言えよう。

前近代と切断した新しい「文学」の確立を目指した坪内逍遥は、『小説神髄』（一八八五―六年）で、西欧の文学概念を紹介した。そこで逍遥は、通俗的な「世態風俗」ではなく「人情」、すなわち、人間の内的な心理の動向を描写することこそが、小説の目的であると述べた。近代国民国家に模様替えしていく日本にあって、文学がはからずも、国家のイデオロギーを教化・啓蒙していく役割をも担ってしまったのは、この「人情」を描くという一点にあった。A

近代の文学が、このように戦争とリンクしてしまうことの根底にあるのは、近代国民国家の基本概念である「国民」にある。「国民」の総意によって保障される国家は、一方で「国民」における義務によって成立する。納税と兵役によって国家はその存立を確立するのだ。この価値の圏域に属する限り、近代国家の政治の根底に埋め込まれた戦争から逃れることなど到底無理である。戦争をめぐる世界の小説を読んでいくとき、そこに共通するのは、戦争へ赴くことを、「運命」として感受するメンタリティがあることである。愛国心に燃えていようが、いやいやながら徴兵されようが、基本的に戦争には行くものだという前提条件は崩れない。もちろん、法律として徴兵キヒ(4)は重罪となっており、社会的にも制裁があるということは、戦争に行く理由となる。だが、それだけが戦争に参加する理由のすべてであろうか。

西川長夫は「もし国家が戦争のための装置」(『戦争の世紀を越えて』平凡社、二〇〇二年)であるとしたら、その国家の一つの制度となっている文学も無縁ではなく、「文学も文学者も初めから、すでに常に戦争にまきこまれている」(同)と、近代の戦争と文学の関係について述べている。国家が要請するナショナリズムは、教育やメディアのなかで繰り返し教え込まれることによって、ほとんど自らの血肉となって、そのこと自体が異様なこととも思わなくなる。格段のナショナリストでなくとも、サッカーやオリンピックで自国の選手を応援し、国旗が掲揚されれば思わず粛々と見守ってしまうメンタリティは、教化された結果だけではなく、それを受け入れたいとどこかで願う欲動(注1)と直結して、身体的な経験として国家への同一化を果たす。戦争が勝利に終わったときの歓喜に満ちた興奮、外国の戦地で自国に似た風土に偶然に出合ったとき感じる郷愁、敵国の兵によって殺された同胞への哀惜と敵への憎しみなど、世界中あらゆるところで語られ描かれてきた戦争の描写を思い出してみれば、そうした感情の持ち方が決して特殊なものではなく、人間的な感受性として認知されてきたことが了解されよう。そしてそれらの感情は、文学が戦争を語るために用いられてきたのである。それはいかに反戦を訴え、平和を求めたとしても、結果として平和な「国家」とか、幸せな「家庭」とか、安穏な「市民」生活とかに回帰・回収される限りにおいて、この国家と戦争、戦争と文学の関係は変わらない。近代国家は戦争を内包している。だから近代の文学には、事前的に近代の戦争が読み込まれている。それは近代の文学が、近代の国家が生み出した一つの制度だからだ。

だが、この抜き差しならない戦争と文学、国家と文学の紐帯を断つことに、文学が力を発揮してきたことにもまた、気づかなければならないだろう。〔中略〕いわゆる「戦争文学」には分類されていない書物にも含まれている、何気ない日常の一瞬に立ち現れる暗渠のような感覚には、もしかすると戦争の影が射しかけられているように思えてならない。

その一例が徳田秋声である。この自然主義を代表する作家も近年、あまり読まれなくなった。〔中略〕戦時協力の文学団体であった日本文学報国会(注2)の小説部会長に就任した経歴もある。だが、私は市井の平凡とも呼べる日常生活の細部に注がれた秋声の眼の鋭さに、何時も圧倒されるのである。そこには淡々とした日常しか描かれていないのにもかかわらず、底の方からグッと押し上げてくるような実感をもって、私の内部に突き刺さってくる。自然主義文学のテーゼ、「無理想無解決」だと言えばその通りである。だが、戦争を「運命」として、何の疑問も持たない「国民」の姿がそこには描かれている。戦時とは実際にこのような風景があらゆる場所に蔓延したであろうことが、肉感的に感じられるのである。

中野重治に『そのとき徳田秋声と武者小路実篤とが顔を見合わせた』(『毎日新聞』夕刊、一九七四年六月一七日)という文章がある。一九四二年六月一八日、日比谷公会堂で日本文学報国会発足式が挙行された折の印象を綴ったものである。中野は失意の中でこの会に赴く。当時、体制的な作家だけではなく、彼のようなプロレタリア作家までもが糾合される対象となっていた。もちろん、入会しないという選択はありえた。だが、それを主張したからといって何になるというのか。国家の成員であるということは、このような決断を迫られるものなのである。

そこで中野は、壇上に並ぶ秋声と武者小路が笑いをこらえるようにたじろいで、うつむき加減に顔を見合わせる一瞬をとらえる。当日の主賓である東条英機(注3)が「由来文芸の仕事は天才者の仕事で」と訓示した瞬間のことであった。秋声は小説部会長に就任しているし、武者小路の戦争詩は文学者の戦争協力として戦後厳しく追及された。その二人が期せずして、東条の野蛮とも言うべき文学への無理解に対して、苦笑という同じ行為を起こしたのだ。二人の微苦笑は、東条の単純な無知へのケイベツ(5)ばかりではなかったであろう。軍人の持つ粗雑な感受性の鈍さへ対する身も世もないような恥ずかしさが、この二人の老大家に襲いかかったのだ。それを見た中野は「かすかな幸福」を感じる。そこにあるのは文学が持つ力への信頼であったであろうことを、私は

確信する。わずかな裂け目のようなところに立ち現れた光景は、人間への信頼でもある。その人間を描いていくために文学があることの確認が、この戦時体制下の三人の文学者に、何も語ることなく共有されたことに、ある種の感動がある。

中野は「肉感的」という言葉をよく使う。『五勺(しゃく)の酒』でも天皇を天皇制から解放するために、共産党は「どれだけ肉感的に同情と責任をもつ」かと、主人公の口から問いかけさせている。それはおそらくは自分の身体の奥底から、自分の問題として他者を理解することはできるかという問いなのであろう。国家や社会や状況の判断によって導き出す理解ではなく、自分の身を賭して共感する人間性こそは、最強の理解となる。ここに立脚することの現実での難しさは言うまでもないが、文学という虚構のシステムこそはこの受け皿と成り得るのだ。D文学と戦争は抜き差しならないほどの共犯関係を結んでいる。しかし、それを打ち破っていく可能性もまた、文学にはあるのだ。

(中川成美『戦争をよむ　70冊の小説案内』岩波新書、二〇一七年、ⅳ～ⅹページ　一部改変の上、引用)

(注1)　人間を行動に向かわせる無意識の衝動。

(注2)　アジア太平洋戦争中の一九四二年に設立された文学団体。文学活動に対する国家管理の手段であった。

(注3)　日本の陸軍軍人、政治家。当時、総理大臣であった。

〔問一〕 傍線部(1)から(5)の片仮名を漢字に直しなさい。

〔問二〕 傍線部A「「人情」を描く」ことによって、なぜ「国家のイデオロギーを教化・啓蒙(けいもう)していく役割」を文学が担ってしまうことになるのか。「兵役」の事例に即して説明しなさい。

〔問三〕 傍線部B「市井の平凡とも呼べる日常生活の細部に注がれた秋声の眼の鋭さに、何時も圧倒される」のはなぜか、本文に即して八〇字以上、一〇〇字以内で説明しなさい。

〔問四〕 傍線部C「このような決断」とは具体的にどういうことか、一〇字以上、一五字以内で説明しなさい。

〔問五〕 傍線部D「文学と戦争は抜き差しならないほどの共犯関係を結んでいる」とはどういうことか、本文に即して説明しなさい。

二　平敦盛の遺児（八歳の若君）は、亡父の遺骨なり面影なりが見たいと賀茂の明神に祈願し、夢の告げにより摂津の国播磨渚を尋ねます。雨に濡れた若君が宿を借りようと立ち寄った御堂の縁には経を唱えながら歩く人がいて、その人は若君から事情を聞くとさめざめと泣きます。その続きとなる次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ややありて若君の御手を取り、縁の上に引き上げさせ給ひ、召したる物の雨に濡れたる露うち払ひ、「こなたへ」とて内に呼び入れ申して、A「さこそは、いときなき身の道にもくたびれ給ふらむ。休み給へ」とて、膝を枕にせさせ申されければ、悲しさとも、くたびれともなく、ただとろとろとぞまどろみ給ひける。その時この主の人、夢現ともなくのたまふやう、B「汝は見もせぬ親を、かほどまで恋ひ悲しみけることの無惨さよ。孝行の志まことに切なるにより、ただ今まぼろしに来たれるなり。汝いまだ母の胎内にありし時、この播磨渚にて、年は二八の春の頃、熊谷が手にかかり討たれしなり。われを思はば孝養に、いかにもよくよく学問をして、大智者となり、広く衆生を済度あれ。それをうれしと思ふべし」とて、C袂に一首の歌をぞ書き置き給ひける。

恋ひ恋ひてまれに逢ふ夜も夢なれや現に帰る身にしあらねば

若君は、父御に逢ひまゐらせ給ふことのうれしさに、「いかに父御」とのたまひて、D御袖に取りつかむとし給へば、夢はそのままぞ覚めにけり。あさましやとおぼしめして、あたりを見給へば、御堂と見えつるは梢を渡る松風なり。敦盛と見え給ひしは、薄、浅茅に乱れたる露ばかりなり。さて御膝を枕にせさせ給ふとおぼしめしつるは、白くされたる膝の骨の苔むしたるが、叢の中に残りたるばかりなり。

（『小敦盛絵巻』による）

（注）○二八――十六歳。
○熊谷――熊谷の次郎直実。
○孝養――孝行。供養。
○大智者――仏の教えに通じた高徳の僧。
○済度――救い導くこと。
○白くされたる――日射・空気・水などにより白く風化している意。

〔問一〕 傍線部A「さこそは、いときなき身の道にもくたびれ給ふらむ。」を現代語訳しなさい。

〔問二〕 傍線部B「汝は見もせぬ親を」について、若君が父親を見たことがない原因は文章中でどう説明されているか、該当する部分を五〇字以内で抜き出しなさい。

〔問三〕 傍線部C「袂（たもと）」はだれの袂か、また傍線部E「袖」はだれの袖か、それぞれ文章中の呼び名（漢字二字）で答えなさい。

〔問四〕 傍線部D「現に帰る身にしあらねば」について、亡父が現実世界へ帰ることのできない身であることを、若君はこの後、どのように理解するか、七〇字以内で説明しなさい。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合で送り仮名を省いたところがあります）。

人知レ好レ利ヲ之害ヲ、而不レ知レ好レ名ヲ之為レ害尤甚。所以不レ知ラ者、利之害麁而易レ見、名之害細而難レ知也。故稍知レ自好ムヲ者、便能軽レ利。X

至リテハ於名ニ、非ズンバ大賢・大智ニ、不レ能ハ免ルル也。思レ立テレ名ヲ、則チ故ことさらニ為ス詭異之行ヲ。思ヘバ保タント名ヲ、則チ曲ゲテ為シ遮掩之計ヲ。終身役役トシテ於名ニ之レ不レ暇アラ、而暇アラン治ムルニ身心ヲ乎。Y

昔一老宿言フ、「挙ゲテ世ヲ無シトレ有ルニ不レ好ルマ名ヲ者。」因リテ発ス長嘆ヲ。坐中ノ一人作タチテ而曰ハク、「誠ニ如シ尊ノ諭。不レ好ルマ名ヲ者、惟ダ公一人而已ト。」老宿欣然トシテ大悦シテ解ク頤ヲ。b

不レ知レ己ヲ為レ所レ売ラ矣。名関之難キコトリ破レ如キクノ是カナ哉。Z

（袾宏『竹窓随筆』による）

（注）○麁――粗雑。
○詭異之行――風変わりな行い。
○役役――心を砕く、あくせくする。
○老宿――長老。
○欣然――喜ぶ様子。
○解頤――口を開けて大笑いする。
○売――売（だま）す、一杯食わせる。

〔問一〕 傍線部a「尤」、傍線部b「而已」について送り仮名を含む読み方を平仮名で答えなさい。

〔問二〕 傍線部X「稍知自好者、便能軽利」を現代語訳しなさい。

〔問三〕 傍線部Y「終身役役於名之不暇、而暇治身心乎」について、その理由を書きなさい。

〔問四〕 傍線部Z「不知己為所売矣」について、書き下し文を書きなさい。また、そのように評される理由を五〇字以内で書きなさい。

出典に関する補遺

令和２年度金沢大学個別学力検査一般入試（前期日程）「国語」の入学試験問題で引用した文章の出典は次のとおりです。

【設問二（出典）】

小敦盛絵巻（『〈新潮日本古典集成〉御伽草子集』所収）新潮社刊